

なぜ、漁獲量は減ったか - 5

テナガエビ (1)

テナガエビは図1に示したように、昭和40年(1965)代に入ってからの、霞ヶ浦北浦の富栄養化の進行とともに、その漁獲量は大幅に増加しました。

霞ヶ浦では昭和50年(1975)に約4300トンを、北浦では昭和51年(1976)に、約1000トンの漁獲量を記録しています。

しかし、両湖とも昭和50年(1975)頃から減少し始め、平成6年の霞ヶ浦、北浦での漁獲量は、それぞれ約1800トン及び約280トンとなっています。

霞ヶ浦、北浦は魚種や漁法、湖内に及ぼす環境変化などが似ていることから、ここでは霞ヶ浦について、テナガエビの漁獲量が多かった、昭和48~54年(1973~79)を仮に好漁期とし、漁獲量が少なくなった昭和61~平成4年(1986~92)を不漁期と名づけて、漁獲量減少について検討してみました。

図2は、好漁期と不漁期に分けて、漁獲されたテナガエビの平均体重で漁獲量を除して、漁獲された尾数を年別に算出して示したものです。

これによると好漁期に比較して、不漁期では定置網(張網、笹浸し)での漁獲尾数が、幾らか減少しているのに対し、曳き網(トロール、イサザゴロ曳き網)では逆に増加しています。

しかし、総漁獲尾数でみると、好漁期、不漁期とも約110億尾と殆ど変化がみられず、漁獲している尾数は、昔も今もあまり変わっていないということになります。

一般に、漁獲尾数と資源尾数は、密接な関係にあることから、漁獲量の多かった時期も、漁獲量が半分近くも低下した近年も、テナガエビの資源尾数は同じであるという結果になります。

それではなぜ漁獲尾数が変わらないのに、漁獲重量は減少したのでしょうか。

図3は、各漁法で漁獲されたテナガエビの、年平均体重の推移を示したものです。

好漁期に比較して、不漁期に漁獲されたテナガエビは、いづれの漁法でも年平均体重が小さくなっています。

漁獲尾数が同じでも、漁獲されるテナガエビの体重が小さいことから、結果として漁獲重量が上がらないということを意味しています。

今回は、漁獲されるテナガエビの年平均体重が、どうして小型になったのかについて考えてみたいと思います。

茨城県内水面水産試験場 (☎0299-55-0324)

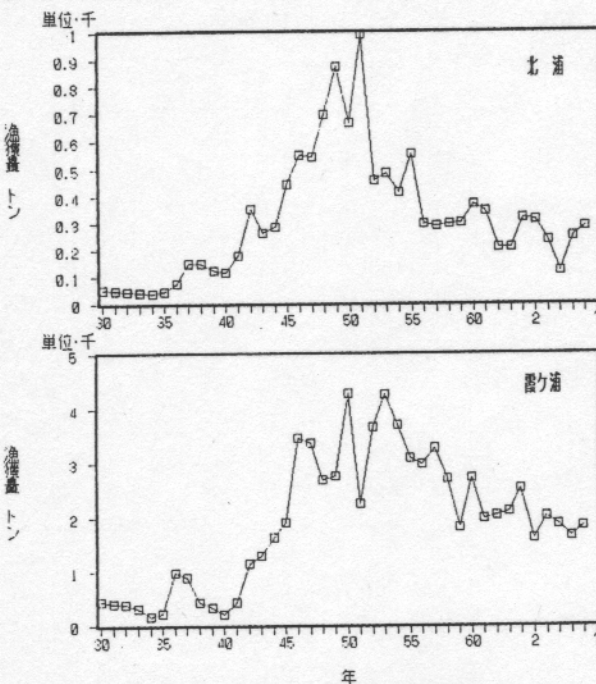


図1 テナガエビの漁獲量の推移

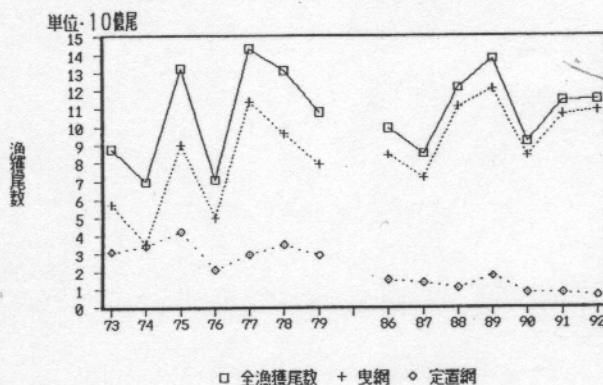


図2 好漁期と不漁期の漁獲尾数

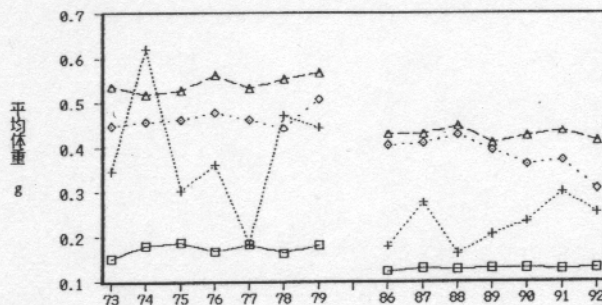


図3 好漁期と不漁期における漁法別の漁獲平均体重

□ トロール + いさざごろ曳 ◇ 笹浸 △ 張網